

萩原朔太郎論

— 啄木の影響と社会性 —

坂根俊英

萩原朔太郎の文学的出発が短歌であったことはすでに知られていた。明治三十五年、十七歳の時、前橋中学校校友会誌「坂東太郎」に「ひと夜えにし」と題して短歌五首を発表している。それ以後、大正三年頃まで約十余年にわたって短歌を詠んでいる。詩を書きはじめたのは大正元年、二十七歳の時からであるから詩人としては晩い出発であった。

最近、朔太郎の自撰歌集「ソライロノハナ」が発見され、筑摩書房版全集第十五巻に収録された。それを読むと朔太郎の短歌はいろいろな歌人や文学者の影響を受けていることがわかる。「影響」という言葉が適当であるかどうかは疑問であるが、中には模倣したものや、換骨奪胎したものや、「本歌取り」的なものもあるようである。それら他の歌人の影響を受けながらもまた朔太郎独自の文学世界も成熟していったに違いない。朔太郎短歌を他の文学者と比較することで分析を試み、詩精神成熟の過程を眺めてみたい。

朔太郎は「自叙伝」において「鳳晶子の歌に接してから私は全で熱に犯される人になってしまった」と告白している。次に両者の歌を並記してみる。

清水へ祇園をよぎる桜月夜こよひ逢ふ人みなうつくしき (与謝野晶子)

朝さむを桃により来しそぞろ路

そぞろ逢ふひとみな美しき (朔太郎)

その他、晶子風の用語として朔太郎が使っているのは「白百合の君」「絵日傘」等数多いが、「白百合の君と別れし夜よめる」という詞書は、晶子や鉄幹らが山川登美子のことを「白百合の君」と呼んでいたという話を思い出させる。次の朔太郎の歌なども晶子の模倣といつてよいだろう。

絵日傘は桃につづきて清水院の
御堂十二に昼の鐘なる (朔太郎)

罪許せ臘脂梅の花縁ふかき

別れなればの一夜の枕 (朔太郎)

これら晶子風の歌群は朔太郎の晶子に対する傾倒ぶりがいかに深かったかを示しているが、朔太郎は明治三十六年七月、与謝野鉄幹主宰の『明星』に短歌三首が掲載され、「新詩社」社友となっている。そのことを反映して、与謝野鉄幹の詩も朔太郎に影響を及ぼしている。

敗荷 与謝野 寛

夕不忍の池ゆく

涙おちざらむや

蓮折れて月うすき

長酔亭酒寒し

似ず住の江のあづまや

夢とこしへ甘きに

とこしへと云ふか

わづかひと秋

花もろかりし

人もろかりし

おばしまに倚りて

君伏目がちに

嗚呼何とか云ひし

蓮に書ける歌 (『紫』)

朔太郎の歌集「ソライロノハナ」には「敗荷集」という章があって、「不忍ノ池、長酔亭に我等が酌みたる酒のつめたさよ」という詞書がついた一連の歌群が

ある。それらはこの寛の詩と同一情趣の上になつて見られる。

柳ちるまた鐘が鳴る不忍の

池をめぐりて秋は来りぬ

み手とればここにも秋の夕日落つ

亭をかこめる枯れ蓮のうへ

鐘なれば敗荷に秋の夕日落つ

君寄り泣けばまた欄におつ

『明星』誌上の短歌評で、朔太郎は「新進中の新進」として、石川啄木と共に期待をよせられている。石川啄木は朔太郎より三年前、明治三十三年、十五歳の時、早くも鉄幹、晶子に心酔して「新詩社」社友となつてゐる。そして、明治三十五年十月に初めて『明星』に短歌一首が掲載されている。啄木の歌集『一握の砂』には明治四十一年夏以後の作五百五十一首が収められているが、その刊行は明治四十三年十二月であった。朔太郎の歌集『ソライロノハナ』は大正二年に編まれている。朔太郎の短歌と啄木短歌との影響関係はかなり濃いものがある。

「ソライロノハナ」には「二月の海」という章があつて歌物語の体裁をとつてゐる。そこには「疲れたる漂泊者のする様に私は例の砂山に寝ころんで海を眺めた」と書かれている。続いて次の歌がある。

海の音ききつつ砂に寝ころびて

空を見て居れば泣きたくなりぬ (朔太郎)

石川啄木の『一握の砂』には次のような歌がある。

砂山の砂に腹這ひ

初恋の

いたみを速くおもひ出づる日 (啄木)

朔太郎は「砂に寝ころびて」と歌い、啄木は「砂に腹這ひ」と歌つてゐる。この違いは重要である。同じ「砂」の上に横たわりながら、両者の姿勢(体位)は対照的である。この姿勢の差異には両者の生きる態度の決定的な相違が象徴的に示されてゐると思われる。

ともに横たわる姿勢において「行動停止」の「感傷」世界に浸透されながら、朔太郎は「寝ころぶ」ことよつて視線を「空」すなわち「不在の觀念空間」に向け、啄木は「腹這ふ」ことよつて「生活」に「肉體」精神を束縛されてい

る。朔太郎にとつては「背中」の下に横たわる「地面」(「現実」は意識圏内に入つてこない)であり、もつぱら遠い「空間」に向けてあてどない觀念的憧憬(ザインしないものへのあこがれ)を寄せるのである。それに対して啄木は「時間」的に遠い過去をのぞみながら、現在の「腹」の下に横たわる「現実」の感觸を忘れてはいない。

両者の相違点をまず述べたが、共通点をもう少し確認しよう。

空はよく晴れ渡つて生ぬるい砂は擦るやうに私の掌の中から指の間をすべり

落ちた。(「二月の海」本文・朔太郎)

いのちなき砂のかなしさよ

さらさらと

握れば指の間より落つ(啄木)

死ぬること思ふ哀しさ生くること

思ふさびしき海に来て泣く(朔太郎)

大海にむかひて一人

七八日

泣きなむとすと家を出でにき(啄木)

大といふ字を百あまり

砂に書き

死ぬことをやめて帰り来れり(啄木)

これらは「海」「泣く」「死ぬ」の配合において類似性を持つてゐる。

小磯なるかの砂山に忘れしは

草も枯るべきつめたき涙(朔太郎)

しつとりと

なみだを吸へる砂の玉

なみだは重きものにしあるかな(啄木)

この二首は「砂」と「涙」の組み合わせにおいて共通性を持つてゐる。しかし、象徴的に言えば、朔太郎は啄木の歌における「なみだの重さ」を知つ

ていたであろうか。ここで再び両者の違いに目を向けるなら、朔太郎の歌が観念的であるのに対し、啄木の歌は生活的であるように思われる。この相違は何に由来するものであろうか。おそらくそれは両者の生活基盤の違いからくると思われる。啄木は生涯貧窮にあえぎ、食と職とを求めて放浪した生活体験を持っているのに対し、朔太郎は生涯定職につかず、親からの経済的援助に支えられて食うに困らなかった。この事実を反映して両者の歌はともに青春の感傷的な浪漫性を共有しながら微妙な差異を生じたのである。

それはそれとしてもう少し両者の歌を並記して類似性を再確認しておこう。

A 何となく泣きたくなりて海へきて

また悲しみて海をのがる(朔太郎)

A' 何となく汽車に乗りたく思ひしのみ

汽車を下りしに
ゆくところなし (啄木)

B 「われ死なむ」「ああ死にたまへいつにても」かく言ふ故に死なれざりけり

B' 「さばかりの事に死ぬるや」

「さばかりの事に生くるや」
止せ止せ問答 (啄木)

A Aは「何となく」の語の共通性と同一語の繰り返し(Aは「海」、A'は「汽車」と共にいずれも漂泊の歌である点が共通する。

B Bは「死」に関する問答体の歌である点が共通する。

C もるひねを計りあたへよびすとるを
のんどにあてよたれかたくせよ (朔太郎)

C' 誰そ我に

ピストルにても撃てよかし

伊藤のごとく死にて見せなむ (啄木)

D ああえたはず、と思ふときは日記にきをくり

死なんと書きて心しづまる(朔太郎)

D' 死ぬことを

持薬をのむがごとくにも我はおもへり

心いためば (啄木)

C Cは「びすとる」「ピストル」の共通語、「たれ」「誰」の共通語とともに自殺願望が自己自身の手による能動的なものではなく受身的に表現されている点において酷似している。

D Dは自殺願望が習慣化し、窮境に陥った時、死を思うことにかえて心の落ち着きを得る心情において共通性を持っている。

さて次に啄木短歌と朔太郎の詩との関係について眺めてみたい。「一握の砂」には次のような歌がある。

わが泣くを少女等きかば

病犬の

月に吠ゆるに似たりといふらむ(啄木)

朔太郎の処女詩集『月に吠える』は大正六年二月に出版された。その「序」において北原白秋は詩集の題名に関して次のように述べている。

「月に吠える、それは正しく君の悲しい心である。冬になって私のところの白い小犬もいよいよ吠える。昼のうちは空に一羽の雀が啼いても吠える。夜はなほさらさら霜が下りる。霜の下りる声まで嗅ぎ知って吠える。天を仰ぎ、真実に地面ぢへたに生きてゐるものは悲しい」。

朔太郎自身は題名に関して「序」で次のように述べている。

「月に吠える犬は、自分の影に怪しみ恐れて吠えるのである。疾患する犬の心に、月は青白い幽霊のやうな不吉の謎である。犬は遠吠えをする。

私は私自身の陰鬱な影を、月夜の地上に釘づけにしてしまひたい。影が、永久に私のあとを追つて来ないやうに」。

これを読むと先にあげた啄木の歌が詩集『月に吠える』の題名に与えた影響は確実のように思われる。啄木の歌において「月に吠える」のは「病犬」であるが、朔太郎も「疾患する犬」と言っている。また啄木の「病犬」は「わが泣く」姿を「吠ゆる」と比喩的に表わしたわけで自画像であったが、朔太郎の「月に吠える犬」も後に続く文によって自画像であることがわかる。

次に「一握の砂」には次のような歌がある。

あたらしき背広など着て

旅をせむ

しかし今年も思ひ過ぎたる

朔太郎の「純情小曲集」には「旅上」という次のような詩がある。

ふらんすへ行きたしと思へども

ふらんすはあまりに遠し

せめては新しき背広をきて

きままなる旅にいでてみん。(後略)

「新しき背広をきて」旅に出るといふ発想は似ているが、啄木の場合はそれが夢に終っているのに対し、朔太郎の場合は外国旅行の夢の代償作用の意味を持っていて、両者の生活的背景の違いを感じさせる結果となっている。

啄木の「一握の砂」の最初の章の題名は「我を愛する歌」となっている。また、啄木の「一利己主義者と友人との対話」には次のような文章がある。

おれは、いのちを愛するから歌を作る。おれ自身が何よりも可愛いから歌を作る。

これをもって啄木の歌をよむ態度の中に自己愛、ナルシシズムの傾向を指摘することができよう。この自己愛、ナルシシズムの要素は朔太郎の「純情小曲集」にも認められるものである。その「愛憐詩篇」という「愛憐」とは何よりも己れ自らを「愛憐」する謂である。「利根川のほとり」には「ある甲斐もなきわが身をばかばかりいとしと思ふうれしさ」とある。

また、「一握の砂」には「煙」の章があつて啄木の「思郷のころろ」が歌われているが、朔太郎には「郷土望景詩」があつてやはり故郷に対する思いがうたわれている。

両者に共通するのは故郷の自然に対する懐旧の情と郷里の人々が彼らに冷たかつたという思いである。啄木は次のように歌う。

石をもて追はるるごとく

ふるさとを出でしかなしみ

消ゆる時なし

朔太郎は「出版に際して」において次のように言う。

郷土ノいま遠く郷土を望景すれば、万感胸に迫ってくる。かなしき郷土よ。人々は私に情なくして、いつも白い眼でにらんである。

単に私が無職であり、もしくは愛人であるといふ理由をもつて、あはれな詩人を嘲辱し、私の背後から唾をかけた。「あすこに白痴が歩いて行く。」さう言つて人々が舌を出した。

朔太郎の詩「公園の椅子」には「いかなれば故郷のひとのわれに辛く／かなしきすもの核を噛まむとするぞ。／(中略)われを嘲けりわらふ声は野山にみち／苦しみの叫びは心臓を破裂せり。／かくばかり／つれなきものへの執着をされ。(後略)」とある。

また啄木は次のように歌っている。

ふるさとに入りて先づ心傷むかな

道広くなり

橋もあたらし

これに対して朔太郎には「小出新道」という詩がある。

ここに道路の新開せるは

直として市街に通ずるならん。

われこの新道の交路に立てど

さびしき四方の地平をきはめず

暗鬱なる日かな(後略)

故郷の自然の変貌を新しい道路を目にすることで感じている点とそれを「心傷むかな」と歌い、「暗鬱なる日かな」と詠んで共通する思を表白している点が注目される。

朔太郎と啄木との関係を追求めた論文には渋谷国忠氏の「朔太郎と啄木に関するノオト」(『萩原朔太郎論』思潮社)がある。

それによると啄木の「食ふべき詩」という評論に表われた詩に対する考え方と朔太郎の詩観に共通性があると述べられている。

啄木は「食ふべき詩」の中で「詩は所謂詩であつては可けない。人間の感情生活(もっとも適当な言葉もあらうかと思ふが)の変化の厳密な報告、正直なる日記

でなければならぬ」と述べている。

ここから私見になるが、ここで啄木の用いた「感情」という言葉は朔太郎が非常に重要視した言葉である。

朔太郎は大正五年六月、室生犀星との二人雑誌『感情』を創刊したが、この誌名の由来は当時の自然主義文壇がこの言葉をひどく軽蔑していたことに対する反発抵抗の気持ちから故意に用いたのである。

また、『月に吠える』の「序」において朔太郎は次のように述べている。

「詩の表現の目的は単に情調のための情調を表現することではない。幻覚のための幻覚を描くこともない。同時にまたある種の思想を宣伝演繹することのためでもない。詩の本来の目的は寧ろそれらの者を通じて、人心の内部に顛動する所の感情そのものの木質を凝視し、かつ感情をさかんに流露させることである。詩とは感情の神経を掴んだものである。生きて働く心理学である。」

このように「感情」を詩において重要視した朔太郎が啄木の「食ふべき詩」を読んで「感情」の語に注目したということ、そこに自らの詩観に通ずる考え方を感じたということ、そこに自らの詩観に通ずる考え方を感じたことは十分あり得ることである。

しかし、啄木の「食ふべき詩」全体において主張されていることはよく朔太郎に伝わったであろうか。啄木はここにおいて「両足を地面に喰つ付けてゐて歌ふ詩」の必要性、「我々に『必要』な詩」の重要性を説いている。

このことは啄木自身の過去における高踏的な詩の試み（『あこがれ』）を自己批判し、「明星」的ロマンティズムや唯美主義的傾向に対してもあき足らなく感じていた事実に基づくものである。「食ふべき詩」の主張は後のプロレタリア詩に通ずる方向性を持っていたと言っている。

しかし、「生活」に困らない朔太郎はおそらく自己流にしかこの主張を読みとることができなかったと思われる。すなわち、朔太郎にとっては詩の社会性というものは問題ではなく、もっぱら個人的な人間の内面における「感情」というものが大切だったのである。

「食ふべき詩」を今回読み直してみても、朔太郎が注目したに違いないもう一つの言葉に「哀傷」という言葉があった。啄木は言う。

詩を書いてゐた時分に対する回想は、未練から哀傷となり、哀傷から自嘲となつた。

帰つて来た私は以前の私でなかつた如く、東京も亦以前の東京ではなかつた、帰つて来て私は先づ、新しい運動に同情を持つてゐない人の意外に多いのを見て驚いた。といふよりは、一種の哀傷の念に打たれた。

朔太郎の『月に吠える』は「竹とその哀傷」という章をもち、詩語としても「雪の上に消えさる哀傷の幽霊のみ」というように使われている。「郷土望景詩」の「中学の校庭」にも「なにものの哀傷ぞ／はるかに背きを飛びざり／天日直射して熱く帽子に照りぬ」と歌われている。啄木は特にこの語に意味をこめて使用しているとは思われないが、朔太郎にとっては重要な語であつたと思われる。『月に吠える』の「序」には次のような箇所がある。

詩は神秘でも象徴でも鬼でもない。詩はただ、病める魂の所有者と孤独者との寂しいなぐさめである。

このように詩を「寂しいなぐさめ」とみる文学観は啄木の「歌は私の悲しい玩具である」（「歌のいろいろ」）とする発想と一脈相通じているように思われる。朔太郎は書簡等を読んでもわかるように「芸術」（詩）を人生の目的とし「仕事」とみなすことはできないと考えていた。これは特に初期において顕著な考え方であるが、その意味で朔太郎にとつてもまた詩は「悲しき玩具」であつたのではなからうか。『青猫』の「序」においても次のように述べている。

かつて詩集「月に吠える」の序に書いた通り、詩は私にとつての神秘でもなく信仰でもない。また況んや「生命がけの仕事」であつたり、「神聖なる精進の道」でもない。詩はただ私への「悲しき慰安」にすぎない。

ここで朔太郎が「文学」（詩）を過小評価しているとみるのは当たらない。彼の詩論を読めば彼自身にとつて「詩」がいかに大きな価値をもつものであつたか理解されるのである。彼はただ「文学」と「実生活（の仕事）」とを秤にかけて「文学」を重いと考えるような神話を信じていることができなかっただけだ。

その点において朔太郎は自然主義文学者の文学観と基本的に異なつていた。自然主義作家たち（日本の）は「文学」の栄光を信じ、「文学」を絶対化したからこそよく「実生活」の不幸に耐えながら、しかも最後の自負心を捨てることがなかった。しかし、朔太郎は生活無能力者であることを「詩」によって特権に転化

することはできず、たえず「実生活」に対して負い目をかかえて生き続けたと思う。彼は「生活者」に対しては終始コンプレックスを感じ、「詩」は決して彼の劣等感を救いはしなかったのである。故郷の人々が「白い眼でにらんであつた」という受け取り方がある被害者意識を含んでいるように思われるのもこの彼特有の劣等感がそこに働いているためである。啄木にとって「歌」が「悲しき玩具」であつたのは「文学」が「生活」に密着していたことを示すとともに、「短歌」の向こうに「小説」というもう一つ大きな目標を望み見ていた事実を反映するものだろう。

しかし、朔太郎は決して「小説家」になろうとしたことはなかった。むしろ彼は「小説家」を「詩人」の下位に価値づけていたくらいである。詩論において彼はしばしば、ヨーロッパにおいては「詩」が文学の王座を占めたこともあるのに日本では「詩人」が不当に軽んじられているといつて慨嘆し憤慨している。

したがって「詩」を重んじる気持ちはあつたのであるが、彼はそれを神秘化したり神聖視することができなかっただけである。だから彼が「詩は私にとっての神秘でもなく信仰でもない。また況んや「生命がけの仕事」であつたり、「神聖なる精進の道」でもない」と書いた時、そこには日本の自然主義作家たちに対する意識的な批判を内在させていたかもしれないのである。それほど彼は「実生活」に対して謙虚であり、詩人としての自らを負う存在として感じ続けていた。

さて、先に私は啄木と比べて朔太郎には社会性が欠けているかのように述べたが、朔太郎の作品に社会性や政治性を感じさせるものが皆無というわけではない。いうまでもなく明治四十三年の大逆事件は啄木に大きな影響を与え、彼は真相を知ろうと多くの資料にあたり、社会主義文献を熟読した。「所謂今度の事」を書き、「時代閉塞の現状」を彼は書いた。そして彼は「今度の大逆事件は政府の圧迫の結果だ」（瀬川深宛書簡 明治四十四年一月九日付）と結論づけるにいたつた。

朔太郎と大逆事件の関係は明治四十三年六月、この事件の群馬県下への波及によって、朔太郎の友人坂梨春水が逮捕されたことと起つてくる。坂梨春水は前橋の文芸誌『おち栗』（明治四十二年五月創刊）の中心的人物であり、『おち栗』には朔太郎も新体詩を寄稿していた。坂梨春水は『明星』投稿の歌人でもあり、前橋中学校の出身であつたが、この事件の余波で懲役四年（四十五年の大赦で出獄）の刑に処せられている。不敬罪の名目で前橋監獄に投獄されたわけだが、彼

が大阪に流寓していた頃、友人に送った長篇論文の筆禍によるものであつたらしい。年譜によれば、大正二年頃、朔太郎は坂梨春水としばしば往来し、次の短歌を春水に贈つた。

没義道の国の法規を憤ほり
いたく言ひたる君にやあらむ
（坂梨君に）

この中で「いたく言ひたる」とは筆禍を起こした論文のことらしい。この歌は「愛隣詩篇ノオト」に書きつけられている。また、「ソライロノハナ」には同じ大逆事件のことを詠んだと思われる次の歌がある。

不敵にもかの王法を破りたる

叛逆人をうつ銃の音

（逆賊は殺されたり、ああ）

この歌において「不敵にも」「王法」「叛逆人」「逆賊」の語には鋭い逆説的諷刺を読みとるべきなのだろう。「ああ」の語に無言の抗議が感じとれるようである。

朔太郎の社会意識政治意識はしたがって決して皆無であつたのではない。「ソライロノハナ」には「新思想と団体」と題した次のような歌もある。

新らしき此の国の人大のごと

口籠せられて生くるはかなき

わが酒場かの党员と日毎きて
カルタきるより楽しきはなし

前の歌は言論統制に対する抗議をモチーフとするものだろう。ここで思い出されるのは「月に吠える」出版後間もなく、内務省から風俗壊乱の理由で「愛隣」「恋を恋する人」の二篇の削除を命じられたことである。この処置に対し朔太郎はただちに「風俗壊乱の詩とは何ぞ」を上毛新聞に書いて抗議している。

さかのぼって日露戦争の戦勝気分に対しても朔太郎は醒めた目で為政者を見ていたことが次の歌でわかる。

鬼どもが笑ふ声にて戦争は
終りぬ勝ちぬ民よ悦べ

当時においてこのような視点から社会をみる事が可能だったのは田山花袋の「田舎教師」の末尾と照らしあわせても稀有なことではなかったろうか。「生活」からも「世俗」からも脱落したアウトサイダーにしてはじめて立ち得る地点である。したがって「民はみなちどきあげぬ美しきノ捕虜の馬車のまづみえしとき」という歌においても「民」と作者との間に一体化関係はないだろう。明治四十四年四月二日、朔太郎は妹幸子に宛てた手紙の中で次のように書いて

今日は初めから日本の悪口ばかり書いたが斯ういふ様なことが政府に知れると私は注意人物にされるのです。少しでも大日本帝国を悪く言ふものは皆露探か無政府党のやうに思はれて国事犯人のやうにその筋の注意人物にされるのですから、今日の手紙などは内所々々にして下さい。

これにはやはり大逆事件の恐怖が反映しているとみていいだろう。しかし、朔太郎は「恐怖」しながらも日本の「悪口」を書かずにはいられたのであったのである。大正十三年二月、朔太郎は「近日所感」という三行詩を『現代』という雑誌に発表している。

朝鮮人あまた殺され

その血百里の間に連なれり

われ怒りて視る、何の惨虐ぞ

前年（大正十二年）九月一日、関東大震災が起こっているが、文学史書によれば「この未曾有の災害下、内務省警保局から出た『不逞鮮人の一派随所に蜂起せんとする模様あり』という無電があらぬ流言を生み、三日から憲兵や自警団により鮮人狩りが始まり、約六千名が惨殺された。翌四日には平沢計七・河合義虎ら九名が不逞分子として検挙され、習志野騎兵隊員によって刺殺された。十六日には帰朝後まもない大杉栄と、その妻伊藤野枝、甥の橋宗一が憲兵大尉甘粕正彦らによって殺害された。軍部官憲が、震災直後の大混乱に乗じた人主義者たち

よる民衆の暴動を幻想し、自警団をして民衆の眼を人々不逞鮮人Vに転じさせ、彼らが人主義者V狩りの方を受け持ったことは明らかだった。」（山田昭夫「編年体日本近代文学史」昭和五十一年二月臨時増刊号「国文学」学燈社）とある。

この朝鮮人虐殺事件に対しては吉野作造の論文等があるが、文学作品への反映は意外と少ないのではなからうか。その意味で朔太郎の三行詩は、その「惨虐」に憤怒する立場で書かれた鋭い社会批判として注目される。

とんで昭和十二年「南京陥落の日」と題した朔太郎の詩は「戦勝」を祝福しているかみえながら「わが行軍の日は慰はず人馬先に争ひ走りてノ輜重は泥濘の道に続けり」というあたりに戦争に対する苦しい思いを秘めているようである。

朔太郎の軍国主義に対する批判はすでに『青猫』における「軍隊」という詩に表明されていた。その詩で作者は「通行する軍隊の印象」を「重量のある機械」、「巨重の逞ましい機械」と捉え、「巨きな集団の動力機械」と見ている。そして次のように歌う。

この兇淫な機械の行くところ

どこでも風景は靉色し

黄色くなり

日は空に沈黙して

意志は重たく圧倒される。

づしり、づしり、ばたり、ばたり

お一、二、お一、二。

ここに「軍隊」の非人間性が表現されていることは明らかである。他の箇所では「無数の疲れた顔が通る」とか「暗澹とした空の下をノ重たい鋼鉄の機械が通るノ無数の拡大した瞳孔が通る」と表現されている。

この明瞭な軍国主義批判の詩と比べる時、先の「南京陥落の日」はいかにも不明瞭に聞える。第二連は次の通りである。

天寒く日は凍り

歳まさに暮れんとして

南京ここに陥落す。

あげよ我等の日章旗

人みな愁眉をひらくの時
わが戦勝を決定して
よろしく萬歳を祝ふべし。
よろしく萬歳を祝ふべし。

確かにここには時代の悪気流に巻きこまれてしまった詩人の姿があるといえないこともない。しかし、「天寒く日は凍り／歳まきに暮れんとして」の二行が象徴する朔太郎の心象は単純な戦争讃歌として片づけられない重みを持っていると思われる。この問題については磯田光一の「日本回帰と戦争詩の位置」（「ユリイカ」昭和五十年七月号）という評論がある。戦時下の朔太郎についてはあらためて別に考えてみたい。ただ、同じ昭和十二年十二月に発表されている三篇の詩をも合わせてこの時点の朔太郎の心象を総合的に捉えるべきことを指摘しておきたい。「広瀬川河畔を逍遙しつつ」では「物みなは歳日と共に亡び行く。／ひとり来てさまよへば／流れも速き広瀬川。／何にせかれて止むべき／憂ひのみ永く残りて／わが情熱の日も暮れ行けり」と歌われている。「父の墓に詣でて」では「わが草木とならん日に／たれかは知らむ敗亡の／歴史を墓に刻むべき。／われは飢ゑたりとこしへに／過失を人も許せかし。／過失を人も許せかし。」と歌われている。「昔の小出新道にて」では「兵士の行軍の後に捨てられ／破れたる軍靴のごとくに／汝は路傍に渴けるかな。／天日の下に口をあげ／汝の過去を哄笑せよ。／汝の歴史を捨て去れかし。」と歌われている。

これらの詩に共通するのは人生敗亡の思いであり、老いてなお魂の飢渴を感じ続ける悲痛な精神である。昭和十五年十一月皇紀二千六百年式典が催されたその夜、大谷忠一郎は渋谷の酒場で「紀元二千六百年を転機として日本は没落するよ」といった朔太郎の言葉を聞いている。（「萩原先生と私の処女詩集」）

昭和十三年、朔太郎は新日本文化の会への加入、『新日本』編集委員、「日本への回帰」その他のエッセイを発表したことから、一部から「日本主義者」と批評され、これに対して朔太郎は「日本の伝統文化に対して深甚な関心をもち、国粹的なものに強い愛着を示す」意味で日本主義者と呼ばれるのならば異存はない、但し「政治上」の日本主義者とは別だと、「辨明」に書いたという。（筑摩版全集第十五巻年譜による。）

朔太郎における「日本への回帰」という問題はもちろん戦時下の日本主義の時流と無関係ではなかった。しかし、また「時流」に乗って主張がなされたとも言

い難く、半ばは朔太郎の人生的歩みにおける必然性をも孕んでいたといえる。すなわち都会的近代に憧憬しながら、遂にそれを得られなかった苦々しい反省が、近代的西欧文化に対する懐疑をよびおこし、日本への回帰を促したという要因である。

こうしたことは朔太郎の社会的反応すべてにわたってもある程度いえることである。朔太郎は文明の中の詩の位置について早くからアフォリズム等で熱心に考えていた。そして近代詩が認められない理由を日本の遅れた文化風土にあると洞察していた。彼の社会批判の根は「詩」を中心とする文明批評の眼につながっているのである。だからこそ文学者に対する為政者の圧迫という問題に特に鋭敏な反応を示したのである。再び啄木との問題に立ち返れば、その点において同じ社会批判の姿勢において朔太郎と啄木はやはり異なっていたといえる。啄木の社会批判はもっと「生活」それ自体に結びつき、「生活」の問題から発して出てくるものであった。啄木が「唯物論」的社会的性となれば、朔太郎は「観念論」的社会的性と一応区別することができる。アフォリズムの多量な遺産を読んでもどことなく空しい感じがあるのはこの観念性のためである。そこには弁証法的な思考方法があるかにみえながら、実はどこまでも物事を二元論的に分割して分析していく思考形態しかない。

いわば「現実」との往復運動が欠けているのだが、だからといってアフォリズムにおけるこうした特性は、朔太郎の社会的性そのものの無効性につながるのではない。やはり詩人の鋭い直観はしばしば見事に歴史の証言として価値を持っているのである。例えば、大正十三年二月『新興』に載った「ある野戦病院に於ての出来事」には次のように述べられている。

「戦場に於ける『名譽の犠牲者』等は、彼の瀕死の寝台をとりかこむあの、充滿した特殊の気分。——戦友や、上官や、軍医やによつて絶えず語られる激励の言葉、過度に誇張された名譽の頌讃、一種の緊張された嚴肅の空氣——によつてすっかり酔はされてしまふ。彼の魂は高翔して、あたかも舞台における英雄のごとく、悲壯劇の高潮に於て絶叫する。『最後に言ふ。皇帝陛下万歳』と。」

かくの如き悲惨事を見るに堪へない。青年を強制して死地に入れながら、最後の貴重な一瞬間に於てすら、なほ彼を麻痺さすべく阿片の強烈な一片を与へるといふのは、さればある勇敢な犠牲者等は、彼の野戦病院の一室に於て、しばしば次の如く叫んだであらう。

『この驚くべき企まれたる国家的奸計を見破るべく、今、最後に臨んで、私は

始^はめて^し素^{じゆ}氣^きであつた。」と。併しながらこの美談は、後世に伝はらなかつたのである。」

戦死を「悲惨事」とみて美化せず、戦争を「企まれたる国家的奸計」と看破した朔太郎が、その後、「阿与」的國家主義に「麻痺」して「よろしく萬歳」を叫んだとしても、このアフォリズムそのものもつ洞察力はこの時点において鈍せない強さをもっている。

(丁)